

「家康は築城名手」 徳川みらい学会が講演会

徳川時代の歴史的意義を研究、発信する「徳川みらい学会」と静岡商工会議所は31日、徳川家康による築城を題材にした講演会を静岡市清水区のマリナートで開いた。城郭考古学者の千田嘉博奈良大学教授が「駿府城から江戸城へ 家康の目指した平和」と題して講演した。

千田教授は徳川家の築城について、甲斐武田家滅亡後に家康が5カ国を領した時代の城郭に石垣の使用が認められるとして、1570年代には石垣技術を獲得していたと指摘。駿府城の天正期天守台

石垣も家康によって築かれたとの見解を示し、家康の築城技術の高さを解説した。家康は日本最大最強の江戸城を築いたとして千田教授は「安土城の信長、大坂城の秀吉に並ぶ築城の名手だった」と語った。その上で、後に名古屋城が計画していた小天守を省略して築かれたことを例に「軍事ではなく政治拠点化を図った。時流を見据え、平和な時代を考えていた」と家康の見識を評価した。



徳川家康の築城について解説する千田教授＝静岡市清水区のマリナート